

# 1851年ロンドン万国博覧会

同志社女子大学 助教 浮網 佳苗

## ロンドン万博のシンボル:クリスタルパレス (水晶宮)

1851年5月1日から10月15日にかけて最初の万国博覧会がロンドンで開催された。19世紀中葉のイギリスは産業革命によってもたらされた未曾有の経済成長の真っただ中にいた。万博はまさにその成果を世界に向けて発信した一大イベントであった。この万博を象徴する建物が、鉄とガラスでできたクリスタルパレスである。この建物は、庭師出身で温室の建設なども手がけてきたジョゼフ＝パクストンが設計し、ロンドンの中心部に位置する緑が広がるハイド・パークに建設された。壁から屋根に至るまで全面がガラス張りであることから、建設開始当初は、安全面に対する人々からの不安の声が大きく、専門家からも崩壊の危険性が指摘されていた。しかし、実際には何事もなく会期が終了し、むしろ素材の斬新さやプレハブ建築の先駆という点で科学技術の進歩を体現する建物として評価された。その後、クリスタルパレスをまねた建物が世界各地で建設されるようになった。

クリスタルパレスの中央部分の天井は半円筒形（写真左）だが、その背景にも興味深いエピソードがある。会場内部の挿絵（写真右）には中央に大木がそびえ立っている。実はクリスタルパレスの建造にあたって、ハ

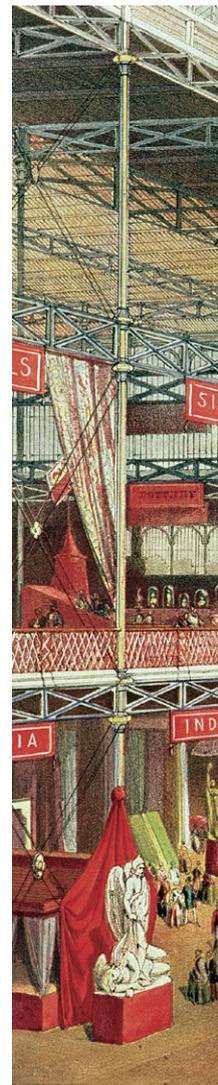
イド・パークの樹木伐採に対するロンドン市民の強い反対があった。とりわけ高さ20mのニレの木については保存を求める声が大きく、パクストンの当初の設計を大幅に変更して、ニレの木が収まるように広く空間をとった半円筒形で建設されることになったのである。この変更は好意的に迎えられており、イギリス人の環境保護意識の表れといえよう。

## 階級を超えた娯楽として

このロンドン万博には江戸幕府ほか日本の諸藩からも参加はなかったものの、34か国が参加し、1日平均4万3000人、延べ人数およそ604万人もの来場客を記録した。しかも、この人数には富裕層だけでなく、かなりの労働者階級の人々も含まれる。ヨーロッパ諸外国に比べて当時のイギリスにおける労働者の所得水準は上がっており、彼らは余暇に支出することが増えていた。万博に行くことは、商業的娯楽を楽しむことでもあった。ロンドン万博はまさにイギリスの繁栄の象徴であると同時に、娯楽の商業化をも示していたのである。

多くの労働者が参加できた背景には、

写真（左）：クリスタルパレス外観  
 写真（右）：クリスタルパレスで開催された第1回万国博覧会  
 （写真提供 ユニフォトプレス）



月曜から木曜までは入場料を1シリングという格安に設定したことにあった。これは労働者の平均的な月収の80分の1程度に相当するため、彼らにとってはそれほど負担になる金額ではなかった。加えて、旅行業の先駆的存在であるトマス＝クックが鉄道切符・宿泊・万博入場チケットをセットにした団体割引ツアーを販売したことで、遠方からの来場のハードルも下がっていた。万博を大々的に報じた新聞や週刊誌のようなメディアの存在も人々の熱狂をあおった。

会場の展示品は10万点に及び、機械や織物、陶器製品、美術品など古代から現代に至る実にさまざまな品が陳列された。例えば、ヴィクトリア女王がヨーロッパやアフリカなどの地域に慈愛の手を差し伸べている様子が描かれた銀製のトレイや、106カラットのインド産のダイヤモンドなどの品々がイギリス帝国の繁栄をまざまざと見せつけ、人々の関心を引いた。これは、労働者階級の人々に、自分たちが生産に関わったモノ

が世界に向けて展示されていることへの感慨をもたらしたと同時に、消費者としてこれらのモノの交換に関与できるという感覚を与え、自分たちも消費社会の一員だという意識を抱かせた。

### 万博の意義

1862年には再びロンドンで万博が開催され、それは第1回を上回る規模であったが、来場者数はそれほど伸びず、1851年万博のインパクトを超えることはできなかった。それほど最初の万博は世界の人々に強い印象を残したのである。イギリス帝国の繁栄、科学技術の発達、消費社会の隆盛といった文明の進歩を強調するロンドン万博が示したように、そもそも万博には国の経済力を世界に披露するための祭典という意味合いが多分に含まれていた。2025年大阪・関西万博の開催が迫っているが、もはや先進諸国の経済発展は著しいとはいえななかで、果たして今日の万博の意義とは何であろうかと考えさせられる。

